



2011年 テレビ完全デジタル化へ向けて

株式会社WOWOW 代表取締役社長 **和崎 信哉**



はじめに

御紹介いただきましたWOWOWの和崎でございます。どうぞよろしくお申し上げます。

この講演のお話をいただいたとき、最初はお断りしようと考えていました。と申しますのも、この会に御出席される方々は私にデジタル放送の「いろは」を教えてくださいました先輩方ばかりだったからです。しかし、ついにはお引き受けする羽目になった理由がございますが、それは会合が持たれる今日が7月24日だからです。実は私にはトラウマとなっている数字（月日）が二つあります。一つが12月1日、もう一つが7月24日です。

本日は、この12月1日と7月24日にかかわるお話をさせていただきますと思っています。

デジタル化がもたらしたトラウマ

私は、NHKに入ってから制作現場、それもほとんどドキュメンタリー一筋で、30年近く番組を作っていました。1996年には、アナログハイビジョン＝ミュージズハイビジョンがいかに魅力的で素晴らしいかを理解してもらおうと、アトランタ五輪へ40日間、ハイビジョン取材陣140名の団長として行ったこともございます。ミュージズハイビジョンは開発されてから数十年たち、技術としても円熟の域にあり、本当に素晴らしい映像方式でした。

そんな矢先、当時の郵政省から「テレビはアナログ放送をやめて、地上波放送も衛星放送もすべてデジタルに変える」という大方針が示されました。全くびっくり仰天というのが1997年でした。「これからが本番というミュージズハイビジョンはどうなるのか？ 本当に地上にデジタル放送に使う電波の帯域が空いているのか？」。そういうことを言ったがためでしょうか、メディア戦略つまりテレビのデジタル化への対応を私自身がしるということになり、皆様が御専門のこの世界へ足を踏み入れることになったという次第です。そこから私の人生が狂い始めて、この10余年を過ごすことになりました。

トラウマの始まり

地上波は電波帯域の都合ですぐにはデジタル化ができない、まずは衛星放送（BS）からということになりました。そして、BSデジタル放送の開始は2000年12月1日という方針が1997年に決まりました。それからは、NHK職員の身でありながら民間BS局の立ち上げにも奔走しました。これまでBSアナログ放送を行ってきたNHK、WOWOWに加えて、新規の民間放送事業者6社が決まったのは1998年でした。郵政省の方々にも、いろいろアドバイスをいただきながら、2000年12月1日の8社一斉BSデジタル放送開始に向けて追いまわられたのがトラウマの始まりでした。

地上デジタルについては、デジタル化の前にアナログ放送で使っている周波数の変更をしなくてはならず、膨大なコストがかかります。最初にシミュレーションで示された額が約800億円だったと思います。すぐに「いや、そんな額ではできないはずがない、2000億円はかかる」というような様々な論議がございました。最終的に、電波利用料から1800億円を使ってデジタル化への道筋を立てるということが決められ、公示されたのが2001年7月25日でした。この日に示されたのは「アナログテレビ放送による周波数の使用は10年以内に停止する」というもので、その日からぴったり10年後の2011年7月24日がアナログテレビ放送の最終期限となりました。

デジタル化への道、苦い思い出、甘い思い出

そして、中間目標として置かれたのが2003年12月1日です。この日までに、東京、名古屋、大阪でデジタル放送をスタートさせるというものでした。この12月1日の目標達成に向けて最も困難だった課題の一つが、電波の送信所をどうするかでした。とりわけめめたのは名古屋でした。東山に新しい電波塔を建てようとしたのですが、市側の対応、景観、電波障害の問題、果てはデジタル電波の人体への悪影響まで取りざたされて、うよ曲折いたしました。結局は瀬戸市に建てることになり、瀬戸市には受け入れていただいたのですが、その周辺から反対運動が起きました。名古屋地区の民放局の方々や、行政の方々と一緒に瀬戸市の新タワーを立ち



上げるために奔走し、2003年12月1日をやっとの思いで迎えられました。このときの苦労は、今でもはっきりと覚えています。

次のステップは2006年12月1日です。この日までに、北海道から沖縄まですべての都道府県の県庁所在地で地上デジタルの放送波を出さなければいけないということになりました。2006年12月1日を最終リミットとした、大きな渦中に再度放り込まれてしまったわけです。この過程では名古屋とは逆のことも経験しました。静岡県の話です。静岡は景勝の地、日本平の山の上に無粋なアナログの電波塔が5本も建っています。それが2011年、つまり完全デジタルになった時はモダンなタワー1本だけでよくなります。デジタル化によって日本平は景観が美しい公園に戻る、そういうことを静岡の民放局の方々や県や市の方々と喜び合ったこともありました。

WOWOWの課題とこだわり

そして本日は2008年7月24日です。いよいよ2011年7月24日まで3年を切りました。今度は有料衛星放送局WOWOWの社長として7月24日に追いかけてられています。WOWOWに来て時間も足りないというのが正直な状況です。WOWOWは、今240万強の方々に御加入いただいています。デジタルの受信者は6割強で、4割弱のお客様はまだアナログを御覧になっていらっしゃる。今年度末までには、何とかデジタルの加入者を73%~75%にしたいと思っています。2010年度中にはアナログの視聴者をほぼゼロにしないことには、2011年7月24日になった途端にアナログの加入者を失うことになってしまいます。広告民放局やNHKと違い、私ども有料放送にとって電波が止まるということは、その瞬間に契約が解除されてしまうことを意味します。何としても2010年度中に、デジタル視聴に移っていただかなくてはなりません。そして新たなデジタルの加入者を増やしていかなければなりません。そのため、デジタル放送の魅力は今、最も訴求しているのがWOWOWだと自負しています。

まず何よりも、私どもは最も高精細な1920×1080万画素のデジタルハイビジョンにこだわっています。次期BSの跡地利用検討の中では1366×768万画素でもいいのではないかという論議もあるようですが、私どもはBSデジタル放送

の魅力は視聴者の方々に訴求するには、最も高精細な画質にこだわっていくことが重要と考えています。

もちろん5.1チャンネルのサラウンド放送についても、技術面ではどの放送局よりも進んでいると思っております。

データ放送につきましては、NHKあるいは民放局でも優れた取組をされていますので、私どもがナンバーワンとは言えませんが、デジタル放送のもう一つの魅力であるマルチチャンネル編成（標準テレビ画質で3チャンネルの編成）につきましては、WOWOWが最も進んでいると自負しています。

デジタルの魅力、マルチチャンネル編成

私は、NHKでメディア戦略にかかわっていた時に、BSデジタル放送でのマルチチャンネル構想を温めておりました。しかし、当時の行政当局からはNHKは既にたくさんのチャンネルを持っているのでハイビジョンをしっかりとやって欲しいと言われ、民放からはNHKの巨大化批判もあり、マルチチャンネルは実現できませんでした。一方、2000年末に開局した民放BS局にはマルチ（3）チャンネル編成の認定が下りました。開局当初の2001年の段階では、確かWOWOWのほかにも2社がマルチ編成をしていたはずですが、ところが広告放送では、クライアントがこれについてこられません。同じテレビ局の中で表裏として競争するということは、クライアントとしては認められないということです。広告放送の民放BS局はそれ以降マルチ編成をしていません。BSデジタルの魅力であるマルチチャンネル編成を、実際に行っているのはWOWOWだけです。



ITUクラブで講演する筆者



今年はテニスのウィンブルドン大会を初めて放送させていただきましたが、トーナメントの段階で同時に別のコートで行われる二つの試合を、191と193の二つのチャンネルを使って同時に生放送しました。それと同時に、192チャンネルでは映画やドラマのファンのための編成をいたしました。準々決勝以上の試合につきましては、最も高画質なハイビジョンでしっかりお見せしたいということで、1チャンネルのハイビジョン放送としました。ウィンブルドンのセンターコートの芝は、準々決勝になれば相当荒れてきます。今年の男子シングルの決勝戦は、フェデラーとナダルというトップランクの二人が6時間を超える激戦を繰り広げました。デジタルハイビジョンは、芝が荒れた様子までを見事に40インチ、50インチの大画面テレビに表現してくれました。いかにボールがイレギュラーするか、芝生が産み出す偶然のドラマの面白さを含めて、6時間以上にわたって中継をさせていただきました。同じ映像を英国で放送したBBCは視聴率が50%を超えたと、外電は伝えていました。WOWOWでは真夜中から早朝にかけての6時間でしたから、数字的にはそれほど高くはありませんでしたが、テニス関係者やテニスファンの方々からは絶賛していただきました。

私どもは、デジタルの魅力をどう視聴者の皆様に伝えていくのか、ここにすべてがかかっていると思っています。そのことがアナログからデジタルに移っていただける最大のポイントだと信じています。これからも、デジタルの特性、特に高画質のメリットを訴求していきたいと思っています。

プレミアム・ペイチャンネルが生き残るために

2011年以降は、NHKとWOWOWがBSアナログ放送で使っていたトランスポンダーが新たにデジタルで利用できるようになります。更に総務省さんの御努力で新規チャンネル分のトランスポンダーがオープンになります。私どもは、番組強化を図りながら2011年以降はBSで複数チャンネルのハイビジョン放送を行っていきたくて考えております。これはプレミアム・ペイチャンネルが生き残る、あるいは成長する最大のテーマです。

欧米で最も成功したと言われるプレミアム・ペイチャンネルに、アメリカのHBOという会社がごさいます。HBOは映画専門の1チャンネルでスタートしましたが、現在は5チャンネルの編成を行っています。映画を中心にしながら、自ら映画やドラマをつくり、教育的な番組まで含めて5チャンネルで編成し、アメリカでナンバーワンのプレミアム・ペイチャン

ネルとなっています。

私どもは、BSでハイビジョン複数チャンネルを実現させると同時に、すべてのメディアと伝送路にWOWOWブランドのコンテンツを出していきたいと思っています。それは、私どもがどれだけ魅力的な番組を確保し、制作していけるにかかっていると思っています。

トラウマが消える日

魅力的な番組制作という点で、有料放送ならではの話がごさいます。WOWOWは、これまではずっと単発のスペシャルドラマしか作ってこなかったのですが、この4月に初めて連続ドラマを制作しました。「パンドラ」という井上由美子さん脚本のオリジナル作品です。実は井上さんには「WOWOWのドラマなら」とまでおっしゃっていただきましたが、その理由の一つが広告放送と有料放送の違いです。

広告民放のサスペンスドラマでは、ほとんどの殺人は崖からの転落死だと言うのです。なぜかという、どのクライアント（スポンサー）からもクレームが来ないからです。広告放送では、代理店を通じていろいろな形で脚本家にもプレッシャーがかかるものなのだそうです。「WOWOWは幸いにクライアントがいまませんから、作家あるいは脚本家の思うとおり最も魅力的な展開で作品ができるのです」とおっしゃっていただきました。

結果は大変好評でした。私がうれしかったのは「これまで連続ドラマで早く来週が来てほしい、次にどうなるのか、こういう形でドラマの放送を待ち望むのは久しぶりのことだ」という番組評を新聞に書いてくださった評論家がいらっしゃったことです。

WOWOWは、制作する番組が地上波の番組とは一味違うもの、CS多チャンネルの専門チャンネルとも違うものであることをねらっています。あくまでもプレミアム・ペイチャンネルとして上質にこだわった番組を作っていくことが、2011年のハードとしての完全デジタル化を支えるもう一つのキーだと信じて、全社にハッパをかけています。

2011年7月24日には、私にとってのトラウマ「12月1日」「7月24日」が見事に消えるように、NHKや民放の方々とも協力しながら、残る3年間を全力で取り組んでいきたいと思えます。是非、皆様方にも御支援をお願いいたします。

御清聴、誠にありがとうございました。

(2008年7月24日第367回ITUクラブ講演より)